

イエスのことば 第 52 回

イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」 (ヨハネ 8:12)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解ながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避（リトリート）と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. リトリートから帰ってきた後、紀元 29 年秋 10 月の仮庵の祭りから冬 12 月の宮きよめの祭りまで、約 3 か月の間に起きた出来事
 - (1) 仮庵の祭りの前
 - ① イエスの家族（弟たち）からの突き上げ（ヨハネ 7:2~9）
 - ② エルサレムへの旅（ルカ 9:51~56、ヨハネ 7:10）
 - ③ 旅の途上で、弟子たる者の心得についての教え（ルカ 9:57~62、マタイ 8:19~22）
 - (2) 仮庵の祭りにおいて 指導者層との衝突
 - ① 仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】（ヨハネ 7:11~52）
 - ② 仮庵の祭りの期間中の個別的な衝突（ヨハネ 7:53~10:21）
律法をめぐり、**光をめぐり**、メシアの神性をめぐり、
生まれながらの盲人の癒やしをめぐり、「羊飼いな」（メシア預言）をめぐり
 - (3) 仮庵の祭りの後（ルカ 10:1~13:21）
 - (4) 宮きよめの祭りにおいて（ヨハネ 10:22~39）

仮庵の祭りでの個別的衝突、光をめぐり

ヨハネ 8:12~20

□アウトライン

- A) 背景：仮庵の祭りは「水」と「光」の祭りであった
- B) わたしは世の光である
- C) 指導者たちからの非難【自分で自分のことを言うな】とイエスの応答
- D) 指導者たちからの質問【あなたの父はどこにいるのか】とイエスの応答
- E) ヨハネの回想

A) 背景：仮庵の祭りは「水」と「光」の祭りであった

1. 第二神殿の時代（紀元前 515 年～紀元 70 年）、仮庵の祭りでは、水が重要な役割を持つ（第 50 回「仮庵の祭り・全体的な流れ」）

- ① 祭司たちは、神殿を出てシロアムの池まで行って湧き水を汲む。容器に入れた水を神殿に持ち帰り、外庭から内庭に入るところで、15 段の階段を上る。
- ② 1 段上るごとに所定の詩篇の箇所（120～134）を歌う。それが「都上りの歌」
- ③ 内庭にある祭壇のまわりを回って、祭壇の台に水を注ぎ、喜びの声をあげる。仮庵の祭りの期間中、初日から 6 日目までは祭壇を回るのは 1 回であるが、最終日の 7 日目は 7 回である。7 日目は「祭りの終わりの大いなる日」。
- ④ 「生ける水」とは、湧き水や、流れている川の水のこと。水たまりの水や、容器に保存された水は、生ける水ではない。
- ⑤ 仮庵の祭りで、生ける水を祭壇に注ぐのは、神の霊がイスラエルに注がれ、民族的救いが成就することを象徴する。

2. 仮庵の祭りでは、光も重要な役割を持つ

- ① 1 日目の夕方（1 日目の終わり）になると、祭司たちは婦人の庭に下りて行く。
- ② そこには、巨大な金の燭台が複数置かれている。それぞれの燭台の先端部には 4 つの金の鉢が付いている。
- ③ 高さ 75 フィート（約 23m）に達する大きなはしごが 4 台用意されている。若い 4 人の見習い祭司がそのはしごを使って登り、金の鉢に油を入れ、点灯する。
- ④ ラビたちの解釈によると、この燭台の光は、**シャカイナ・グローリー（神の臨在を示す光）を表現**するものである。さらに、ラビたちはメシアとの関係も意識していた。ゼカリヤ 14：16～21 により、仮庵の祭りはメシアの王国によって成就するから、であろう。
- ⑤ この儀式のときは、女性たちは婦人の庭の回廊に座している。男たちは婦人の庭より下の方で座り、女性たちの中に混じることは許されなかった。ゼカリヤ 12：12、「その妻たちもひとり嘆く」による。

B) わたしは世の光である（ヨハネ 8：12）

12 節 イエスは**再び**人々に語られた。「わたしは**世の光**です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」

- 「再び」・・・仮庵の祭りで起きた個別的な衝突が 7：53 から記されており、7：53～8：11 では「律法をめぐる」衝突の記事があった。8：12 の「再び」

とは、次の出来事「光をめぐる」に場面が移ることを意味する。

- 「わたしは世の光です」・・・「わたしは、婦人の庭に点灯する、あの巨大な燭台の光です」というたとえ話。この光は、ラビたちの教えでは、シャカイナ・グローリー（神の臨在を示す光）を表現し、メシアとも関係する。したがって、このたとえ話は、「わたしは、神から遣わされたメシアである」という宣言。

C) 指導者たちからの非難【自分で自分のことを言うな】とそれに対するイエスの応答

13 節 すると、パリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分で自分のことを証ししています。だから、あなたの証しは真実ではありません。」

1. イエスの応答① わたしは自分自身のことを証言できる。なぜなら、自分がどこから来て、どこへ行くかを知っているから（＝天から来て、天へ帰る。神だから）

14 節 イエスは彼らに答えられた。「たとえ、わたしが自分自身について証しをしても、わたしの証しは真実です。わたしは自分がどこから来たのか、また、どこへ行くかを知っているのですから。しかしあなたがたは、わたしがどこから来て、どこへ行くのかを知りません。」

2. イエスの応答②、あなたがたは人間にすぎないから、そのさばきを誤る。わたしは今はだれもさばかないが、さばくなら真実である。わたしは一人ではなく、わたしを遣わした父なる神と共にさばくからである

15～16 節 あなたがたは肉によってさばきますが、わたしはだれもさばきません。たとえ、わたしがさばくとしても、わたしのさばきは真実です。わたしは一人ではなく、わたしとわたしを遣わした父がさばくからです。

3. イエスの応答③、モーセの律法にも二人の人による証言は真実であると書かれている。わたしのことは、わたし自身と父が証ししている

17～18 節 あなたがたの律法にも、二人の人による証しは真実であると書かれています。**わたしは自分について証しする者です**。またわたしを遣わした**父が、わたしについて証ししておられます**。」

- 「わたしは自分について証しする者です」・・・イエスはこれまでに、多くのしるし、癒やし、メシア的奇跡を見せてきた
- 「父がわたしについて証ししておられる」・・・イエスが受洗したときに、天

から神の声が響いた。それはバプテスマのヨハネはじめ多くの人々がいた場所起きて、よく知られた事実であった。

D) 指導者たちの質問【あなたの父はどこにいるのか】、それに対するイエスの応答

19 節 a すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」

19 節 b イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。**もし、わたしを知っていたら、わたしの父も知っていたでしょう。」**

- 「もし、わたしを知っていたら、わたしの父も知っていたでしょう」・・・イエスを見た者は父を見たのである（参照、ヨハネ 14：9）。ユダヤ人の指導者たちが父なる神のことがわからなかったのは、イエスを拒否したからである。イエスを見ようとしなから、父なる神が見えなくなるのである。

E) ヨハネの回想

20 節 この話をした場所は神殿の献金箱のところであった。公然とイエスは教えていたのに、誰もイエスを捕らえなかった。イエスの時が来ていなかったからである。

- もし、この時にイエスが逮捕され処刑されていたら、十字架刑ではなく、石打ちの刑。翌年、ローマによりユダヤ人たちの自治権は縮小され、自分たちの裁判で死刑を執行することはできなくなる。これにより、ユダヤ指導者層はイエスをローマ総督に訴えて、十字架刑を要求することになる。
- 木にかけられて死ぬことは、神に呪われた者の死に方として預言されていた（申命記 21：23）。メシアは、木にかけられて死ななければならない。私たちの身代わりとなって私たちの罪を背負い、神に呪われた者として死ぬためである。
- イエスの時とは、翌年、紀元 30 年の春、過越の祭りのときに、十字架刑で死ぬ時、である。
- 紀元 30 年でなければならない理由がもう一つある。それは、過越の祭りの日から 3 日目が初穂の祭りとなる年である。過越の祭りの日に十字架にかかり、死んで、葬られる。そして翌日が安息日となり、さらにその翌日、週の初めの日が初穂の祭りとなる。初穂の祭りはメシアの復活を予表する祭りである。（レビ 23：4～11、I コリ 15：23）